
平穩な生活を所望します！～創造～

水連 呉羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平穏な生活を所望します！〜創造〜

【Nコード】

N7099Y

【作者名】

水連 呉羽

【あらすじ】

平凡になれない少女、南雲瑠璃は平穏を望んだ。しかし瑠璃は車の衝突事故によって死んでしまった。そして記憶を持ったまま、そして巨大な力を持って転生する。転生した場所は地球だけど神様…神の能力を使える世界で…。

序章

学校に行つて友達と話したり、家に帰つてご飯を食べながら家族と今日の出来事を話したりする。

穏やかで平和な生活……それがパソコンのキーボードで文字を打っている16歳の少女南雲^{ナクモ ユリ} 瑠璃の望むことだ。

ただ、穏やかで平和な生活を送れたらいい。巨大な力を持っていたとしても自分を理解してくれればいい。

そんなに難しいことは望まない。ただ自分の見える範囲の人たちには笑っていてほしい。それが望んでいることだ。

瑠璃は本来名前の通り瑠璃色の髪と瞳をしている。けれど黒髪黒目が当たり前な日本にとって瑠璃色の髪や目を持つ人間が出てきたらどうなるだろうか？

少なくとも変な目で見つ人間が出てくるだろう。だからこそ瑠璃は自分の髪の色を隠すためにカラーコンタクトやヘアスプレーなどで色を黒に変えている。

彼女が今打っているものは南雲グループが使う書類だ。南雲グループとは、ホテルや食品関係、医療、警備など様々の企業の会社をまとめたものだ。

南雲グループは今や世界の頂点に立っているグループで何かをする

となると大変なのだ。

ちなみに今の代表つまり南雲グループの中で権力を持っているのは南雲^{ナグモ シゲル}茂。瑠璃のおじいさんにあたる人だ。

瑠璃はおじいさんに自分の才能を認められてたまにこうやって仕事を手伝っているのだ。

コンコンと音が鳴ったので入ってきてもいいと伝えたと白いドアのあいてその間から覗いたのは、腰まで伸びている黒い髪を持つ少女。彼女は瑠璃の部下で秘書をしている。

名前は東条^{トウジョウ}白^{ハク}。黒い髪は普通だが、目の色が白いからといって捨てられていたところを瑠璃が拾い、部下になった。

白以外にもこのような状況になって拾われた人間がほかに3人いる。処理が得意な白は秘書。その他に、茜^{アカネ}、翡翠^{ヒスイ}、琥珀^{コハク}といった色の名前を持った人間が存在している。

ちなみに茜は女の子で芸能関係を、翡翠は男の子で情報関係を、琥珀は翡翠と同じく男の子で警備関係を担当している。

瑠璃は打っている手を休めることなく白に用件を尋ねる。

「もうそろそろ時間になります。ほかの3人ともそろっておりましてで玄関の方にお越しく下さい」

「ん？もうそんな時間？分かったすぐに行く」

打っていた手を止めてデーターを保存する。

そして3人の待つ玄関まで歩いて行った。

玄関で待っている黒髪の人たち。だがその目は白と同じように黒い

目ではなく茜色、翡翠色、琥珀色をしている。

「まったくまだかよ。おっせーな白の奴」

「まあまあおちつけ。さっき呼びに行っただろ……」

「そうよ！白も忙しいんだから仕方ないじゃない！」

「それはわかつているけどよー」

「ちよつと黙ろうか？廊下まで聞こえてきたんだけど？」

キキ と扉が音を立てて開く。奥にいたのは上司である瑠璃とその後ろに下がっている白の姿。

上司の姿に喜びを顔に出す3人とも……。

「だってー。主に早く会いたかったんだもん！」

「そうだそうだ！」その言葉に同意してうなづく男の子たち。

「まったく四天王がこんな調子では……」

白が溜息を吐いて頭を抱えるように右手を顔に当てる。

「まあ久しぶりに会ったから仕方ないか……」

苦笑いしながらそう言う瑠璃。

「あのね、友達にもらったんだけど……。主にあげる！」

茜が差し出してきたのは日本茶。

差し出されたものに目を輝かせて瑠璃。その姿を見て満足げにうなづく茜。

「ありがとー。うれしいよ」

茜に抱きつき耳元で囁く。するとどうしてか赤くなってしゃがみこむ茜。

「ああ……。たく。しょうがねーな。主、そうやって男の声を使って女の耳元でささやくのはやめろ。女の子の腰が抜けるだろ。前にも言った通り緊急時以外に男の声を使うのはやめてくれ」

「ごめんごめん。でも茜が可愛くて仕方なくてさ」

そう言ってくる琥珀に反省した様子もなく謝る瑠璃。

「主」

主というのは4人が瑠璃を呼ぶ時に使うあだ名のようなものだ。言うなって言っても聞かないので瑠璃はあきらめた。

「時間が迫っております。お急ぎください」

「ああ。分かった」

いくよ3人とも。

すでに伯は玄関の前に止まっている車のドアを開けており、瑠璃は呼びかけた。

といつても茜は腰を抜かしており立てないので琥珀がおんぶしている。

「で、鈴^{リン}は？」

鈴とは瑠璃の弟でゲームを作るのにはまっている。そしてお姉ちゃん大好きっ子のシスコンだ。

「鈴様でしたら先に本家にいます」

問いかけに対して丁寧^{テイネ}に答える。

次の瞬間、激しい衝撃を襲う。

4人は頭を打ち、気を失った。

「うっはぎっ？」

白い空間……

しかのその空間に色がある。

色は瑠璃色……。

そして人間。

その人間は、身動き一つせずただただ目を閉じている。

白い空間にある、一見周りと同化している扉の奥からは走ってくるような足音が聞こえてくる。

その音に眠っていた彼女、南雲瑠璃はゆっくりと目を覚ます。

「ここどこ……？」

とたんにバツタンと言う音が空間に響く。

その音は白い扉が勢い良く開いた音である。

人間が入ってきた。人数は4人。黒い髪を持つ人間。

彼女は日本人なので黒い髪を持つ人間を見たことは多数あるだろう。しかし入ってきた黒髪の人間は彼女にとって見なれた人たちだった。

東条白。北条茜。西条琥珀。南条翡翠。彼らは瑠璃の家族であり部下だ。

時期はバラバラだが瑠璃に拾われ、名前と生きる場所をもらった。

苗字が似ていることと、名前が色の名前が特徴だ。

彼らが捨てられた理由は簡単な話、彼らの瞳の色が日本人の色である黒ではないからだ。

彼らの瞳の色は名前の色と同じである。まあそこからつけられたので当然と言われれば当然だが…。

「主ー」

入ってきてその言葉を言われる。

「なに？」

「大丈夫ですか？」

そう心配してきたのは彼女の部下である白。常に敬語である。受け持っているのは秘書。

「どこも悪くないか？」

同世代の年代の男の子より大人っぽいイメージを持つ琥珀。警備関係の仕事をしている。

「主ー。心配したんだよ？」

かわいらしい容姿を持っている茜。芸能関係の仕事をしている。

「そうだぞ。俺も心配したんだからな！」

琥珀とは逆に少し子供っぽいイメージを持つ翡翠。情報関係の仕事をしている。

この4人に言われたことで安心したのかかたくなっていた表情がだんだんとほぐれていく。

「で？ここはどこ？」

さつきから氣にいていたことを口に出す。

「さあ？私にもわかりません」

「あの時、俺たちは確かに車の事故にあったはずなんだがな……」

「わたしたちも分からないの……。ごめんね？」

「…………。来る途中玄関みたいな扉があったけど……」

最後に発せられた言葉で視線が集中する。

視線の先には翡翠。

「本当か？」

「ほんとほんと」

琥珀の質問に答える翡翠。

「主。どうします？」

白がそう問いかける。

少し考えるように間を開けた後、
「行ってみようか」そう答えた。

先ほどの会話から翡翠を先頭に歩く。

目的地は玄関。

「まだか？」

「その角を曲がったらあつたはず……あつた！」

曲がった先に会ったのは白い扉とは違い少し灰色の入った扉。

「誰が開ける？」

「私があけましょう」

白が扉に手をかけ扉を押していく。

開いた隙間から出てきた光がまぶしい。

光りの強さが段々と強くなっていき範囲の広くなる。

目が光りになれば、白は扉の外にでる。

しかし3歩ほど出たことで足が止まる。

「白。どうした……？」

呼びかけに答えない。普段の白ではありえないことだ。

不審に思い瑠璃は白に近づくために扉の外に出る。

固まっている白に近づくとも目の前を見て固まっていた。

視線を白の向いている方向に向けてみると白い色で埋まっていた。

外は普通いろいろな色があると思う。しかし目の前は白い色で埋ま

っていた。所々に青や赤などが見えるがほとんどの色が白だ。

よく見てみると人間の姿が見える。そのほかにも様々な形をしたも

のがいる。

異様なのはそれらが全部こちらの方角に向けて頭を下げていること
だった。

人型は土下座をしている。その異様な光景に一瞬固まったが、瑠璃
は話を聞くために近づく。

「話がしたいんだけど代表者は？」

それらの一ついや一人が頭をさらに深く下げ

「わし…私です」

そう答えた。

「私たちなんでここにいますか？」

するとその代表者…老人はすいませんでした！そう謝ってきた。

「ちょ！なんで謝るんですか？それに敬語じゃなくても結構ですよ」

「ではお言葉に甘えて…。実はな、そなたは強大な力を秘めておった。そしてそなたがいた世界の神がある日突然なくなってしまったんじゃ。世界の神がなくなればその世界はなくなってしまふ。しかしそなたがいた。当然世界の神がなくなったのでその神が作り上げた妖精や種族はなくなってしまふがそなたが平穩を望んだことによつてそのままの状態になった。ここまでは大丈夫かの？」

コクリとうなずく。

「そなたはまだ幼かったから自分の無意識のうちに世界の神を作った。まあそれがわしじゃな。そしてたくさんの神が生まれたんじゃ。しかしの…、その神たちがそなたの力の内、神力つまり神の源じゃなそれを吸い取りすぎたんじゃ。神力の中にも運の力も含まれておる。そのおかげでそなたは事故に巻き込まれて亡くなったんじゃ。…、ああ吸い取ったおかげで力が強くなって、その神は世界の神になったがの」

「……………は？なくなった？死んだってことか…なるほど……………」

「ってちよつとまで…ということはこの4人は巻き込まれたのか？」

「まあそういうことになるのぉ」

すまん。そう謝ってくる神…。

「で？あなたは神の中でも最高位の神になるんですか？」

「そうじゃの」

「じゃあ、私をここに連れてきたのはなぜですか？」

最高位の神…最高神は頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7099y/>

平穏な生活を所望します！～創造～

2011年11月26日19時50分発行